

## 「親切」の正体

中三

「親切」と「差別」の境界線って、どこにあるのだろう。電車で席を譲る。重たそうな荷物を持つ。私は今まで、これらの行為が「親切」だと信じて疑わなかった。

しかし、ある日の出来事が私の価値観を一変させた。その日、私は友達と出かけるために電車に乗った。向かい側の座席には、私と同じ中学生くらいの女の子が座っていた。私は待ち合わせの駅に着くまで本を読んで暇をつぶしていようと思っていたので、読書に没頭していた。何駅か過ぎた頃、ふと目を上げると一人のおじいさんが乗車してきていた。電車は混雑していて、満席だった。すると、向かい側の女の子が立ち上がり、おじいさんに向かってこう言った。

「よろしければ、どうぞ。」

私は、すばらしいと思った。道德の教科書で見たことのあるような光景。とても勇気のある行動だと思うと同時に、私だったらどうしていただろ

うと考えていた。だから、私はおじいさんの次の言葉を予想だにしていなかったのである。

「大丈夫です。」

しかも、その声は不機嫌そうでした。女の子も、もう立ち上がってしまったので座るわけにもいかなかったのか、座席の一つだけが空いている変な状況になっていた。

私は、衝撃を受けた。私の知っている「よろしければ、どうぞ。」の返答は決まって「ありがとうございます。」だったから。おじいさんはなぜ不機嫌になったのだろうか。それは高齢者扱いをされていると感じたのかもしれない。その男性は私や女の子から見れば「おじいさん」だった。でも本人はそう思っていないかもしれない。または、足腰を鍛えるためにあえて立っていた可能性もある。女の子は親切心で勇気を出して声をかけたのに、その「親切」はおじいさんにとってはいい迷惑であり高齢者に対しての「差別」になってしまったのかな、と思った。

「差別」とは何か。その言葉の定義は「偏見などによって他と区別し、不平等な扱いのこと」。今回、女の子は男性に対して、彼が「高齢者」だ

と思い、席を譲るという特別扱いをした。そして、これは「差別」と受け取られてしまったのかもしれない。

では「親切」とは何か。それは「相手に対する思いやりがあつてやさしいこと」だそうだ。女の子は男性のことを思いやって、席を譲るという優しい行為をした。つまり、女の子の行動は「親切」でもあつたのだ。

「親切」と「差別」。一見かけ離れているようだが、実は物事を多面的に見てみると、隣り合っているのかもしれない。私は、あの日の電車内の出来事があつて気付かされた。大切なのは受け手がどう感じるかだ。男性は「差別」されたと思つたから不機嫌になった。私は「親切」だと思つたから女の子のことをすばらしいと思つた。それだけの違いなのである。

私はあの一件以来、困っている人に声をかけるのを、今まで以上にためらうようになってしまった。拒絶されたらどうしよう、相手を不快な気持ちにさせてしまったらどうしよう、と考えると声が出なくなってしまう。

ただ、それだけではダメだということもわかつ

ている。それをどう受け入れるかは相手次第なのだ。行動しないと、「親切」には絶対にならない。行動したらパーセントでも「親切」になるかもしれないのだ。

そうやって、人を思いやって行動する人が増えると、「差別」は少しずつ減っていくのだと思う。「親切」と「差別」の境界線。今は曖昧でも確かに存在するこの線がなくなり、いつか「親切」でいっぱいになる世界を一人一人が創っていったら、素敵なことではないだろうか。